

熟塾新春恒例行事

文楽大夫・豊竹英大夫氏と出会う 新春文楽鑑賞会

2005年1月8日(土) 午後3時～

国立文楽劇場・法善寺横町「正弁丹吾亭」

恒例の熟塾の新春行事・文楽鑑賞会と舞台を支える演者との出会いということで、今回は、文楽大夫の豊竹英大夫氏からレクチャー戴いた。今までは、主に文楽の歴史が中心だったが、実技指導ということで、客席に響く声の発声法を伝授いただく機会を得た。大声を出すのは、喉から出すのではなく、お腹から息を出す。息で語る事ができれば、情を出すという段階になるのだが……。日頃、人前で並はずれた大声を出すことがないので、先ずは呼吸法をと、全員椅子から先ず立ち上がり。肩幅に足を広げ、肩の力を抜いて息を吸い込み、両手を前に突き出すと共に静かに息を出し吐き出す。それを、何度か続けて、気持ちと呼吸を整える。

その後、配られた用紙に書かれた台詞を全員が大声で一本調子で語る練習。「父様の名は、阿波の十郎兵衛、母さんは お弓と申します」奇しくも、これは、9月に徳島の寄井座でみた『傾城阿波の鳴門』の母との出会いでお鶴の台詞。全員で語りだす。「みんなで語ったら、何となく自分も声が出ているようですが。では半分、次に3組に分けたこちら」と人数が絞られていく。で、遂に一人ひとりが指名され、子供の調子でと、口写しのつもりだが、どうも調子が取れない人もいる。他人の語り口を聞いて、英大夫の指導が飛ぶ前に「違う！」と思わず声をあげる人もいて、大笑い。他人の調子はずれは、聞き分けられるのだが、自分が語る段になると、調子がとれない。難しい。使命されて、息を吸い込むのだが、照れ笑いがとまらなかつたりで、声が出ない。マイクなしで、広い会場に台詞を届けるだけでもたいへんなのだから、義太夫節というリズムに情を乗せてとなると、更に難しい。上方落語でも、長屋の連中がかき集められて大家さんの調子はずれの浄瑠璃を聞かされるという噺や、日頃の会話も義太夫節で語る文楽ファンに、口三味線が得意な人が訪ねて来て二人で大騒ぎするなどの演目があるが、かつて流行歌のように人々の暮らしと共にあった文楽と大阪人との触れ合いを今に伝えている。また大夫は、一人で多くの登場人物を語りわけ。それぞれの声だけでなく、思いや情も語り分けるが、続いては子供の声から、侍の台詞「さすがの、久吉。よく言ったアリ」という大見得の場面。これは勿論、太い侍の声、豪快に語る上に、久吉で上手に息継ぎをして、後半の天晴れであるぞという語気のアに重きを置いた台詞回しへと続く。たった一言ながら、日頃大声を出すことがな

い上に、侍となると……。一人ひとりに指導が飛び、浄瑠璃の聞くと語るとは大違いを体験。あっという間に、時間となり、英大夫を囲んで集合写真を撮って4時からの2部を鑑賞。今年は、人形の動きも大夫や三味線の奮闘振りもしっかりと鑑賞できる大夫座の前の席でたっぷり文楽を堪能させていただいた。



かるかやどうしんつくしのいえづと 苺萱桑門筑紫轆

豊前の重臣・新洞左衛門の娘ゆうしでは伊勢神宮の御座子であったため、夫を一生持たない定めにあります。異性を知った者が触れると輝きを失うという夜明珠を受取る使者にゆうしでは父と赴きます。宝を渡すまいとする堅物太郎の策で彼女の前に媚薬「守宮酒」が運ばれます……。神秘にして呪術的な展開の中、権力争いに巻き込まれる父娘の哀れさが浮き彫りにされます。

てんあみじましくれのこたつ 天網島時雨炬燵

紙屋治兵衛は曾根崎の遊女紀の国屋小春と深い仲でしたが、それが小春の本心でないと知り別れてしまいます。その騒動も落ち着いたかに見えた頃、炬燵には潜り込む治兵衛の頬に伝う涙。それを見た女房おさんの発言から物語りは意外な展開を始めるのです。近松門左衛門の名作「心中天網島」のドラマに起状を盛り込んだ世話物の人気作品。

もどりかごいるにあいかた 戻駕色相肩

新玉の、年の三歳を待ちわびて待ちたる顔に待つ顔を合せ鏡の布団さへ、色で持てるか四つ手駕籠……。花の咲き誇る洛北は柴野。そこに、江戸、大阪の出身である二人の駕籠かき、そして客である京島原のかむろがそれぞれ三都の郭の模様を語り、踊りだします。お正月にふさわしい豪華絢爛な一幕。

終演は、午後8時過ぎ。冷たい北風に押されながら、新年会を兼ねてお鍋でもつつきながらということで、法善寺は「正弁丹吾亭」へ。ここは、「夫婦善哉を食べながら、織田作之助の人生を味わおう会」の講師、井村さんと10月にと約束して五日後に中座から出火。開催した

日は火災後横丁を通り抜けできるようになった日。焼けた店の前にはベニヤ板が打ち付けられ、元の横丁として建て直しができるかとの論争のまっただなか。講座には「正弁丹吾亭」の後藤社長も会場に駆けつけて、復興のための署名を呼びかけていただいた。そして、横丁は復活。再建された「正弁丹吾亭」で新春に寄せ鍋をと英大夫を伴っての宴となった。店内は、一階はカウンター席に、椅子席、二階は、小部屋に仕切られ、掘りごたつもある座敷で和気藹々と英大夫との酒盛りとなった。徳島から、寄井座の岩丸さんも駆けつけて文楽鑑賞後合流。英大夫は気軽に参加者からの質問に受け答えしながら、文楽談義に盛り上がった。楽しい時間はあっという間に過ぎて、うどんに雑炊、デザートをたいらげて、お酒もほどよくまわった一群が法善寺横町から細い小道を抜けて「今年も良い年でありますように・・・」とそれぞれの願を水掛不動さんにかけて参拝し、ワイワイと記念写真。年の初めの文楽鑑賞。世界無形遺産に指定された“文楽”。演者は勿論、それは長らく文楽を楽しんできた大阪の先人の思いに支えられていたのだと法善寺横町の雰囲気と共に、英大夫さんを囲んでの華やいだ宴の余韻を楽しんでいた。見上げると、水掛不動さんの頭上

にも星々が凜々と北風に吹かれながら輝いていた・・・。

参加者 一般：後藤稔・古丸勇・西野薫・岩丸多津子
塾生：秋山建人・井上章・大森史子・木田信生子・北原祥三・佐々木英彰・塩本妙子・杉山英三・田中稔三・中村孝夫・中山恵三・原季美子・原田彰子・林章・堀内紀江・森川千世子・森川道子・山本たかし・山本ゆき

豊竹英大夫のページ

<http://www.ne.jp/asahi/anata/watasi/bun001.htm>

英 photo 日記より

『熟塾』の会とはナニワの文化を基点に、ひろくなんでも教養文明を体現しまくろう、という意欲的なグループ。月1回の催し会がもう10年程続いているんだからタマゲル。

勿論、文楽にはよくいらっしゃり、今回は僕がゲストに。夜の部開演前に1時間程、劇場予備室で義太夫発声レクチャーをした。20人位の人が皆、熱心に大きな口を開ける。終演後ゾロゾロと法善寺の『正弁丹吾』（綺麗に再建されていてビックリ）へ。

代表の原田彰子さんは商社のOL。話題豊富に切り込んでよく喋る人だが、しかし実にさわやかな、稀有な人。世話役の北原祥三さんは同志社の『落研』でならした人で、落語界には精通。話を聞かせてもろてるだけで楽しかった。原田さんを紹介して下さった木田さん。北原さんと旧知の間柄である関学の後藤先生も同席。世の中、狭いですねえ。

第三回 英大夫の会

ゲスト 落語 桂雀松

義太夫 摂州合邦辻 合邦住家の段

浄瑠璃 豊竹英大夫

三味線 鶴澤 清友

平成17年3月18日(金)午後6時半開演

会費：当日4000円(前売り3500円)

会場：大槻能楽堂 06-6761-8055

地下鉄谷町4丁目 出口南へ約300m

地下鉄谷町6丁目 出口北へ約300m



～ 文楽と阿波の人形浄瑠璃合作で、明治以来の復活上演 建治寺縁起鑑賞 ～

徳島・建治寺縁起復活上演小屋掛け人形浄瑠璃鑑賞バスツアー

出演：徳島神山町 阿波の人形浄瑠璃一座 寄井座

文楽大夫 豊竹英大夫氏・文楽三味線 鶴澤友清氏

日時：3月26日(土) 午前8時30分・午後9時 大阪駅集合解散

行程：大阪駅～徳島建治寺(昼食)～神山温泉・四季のホテル(夕食)～大阪駅

会費：塾生 12000円・一般 13000円 (交通費・昼食・夕食・入湯料含)

徳島には、郷土の戯作者による阿波独自の浄瑠璃台本がいくつかあるが、それらは数回の上演後、姿を消している。今回は、そうした外題の中から「実録建治山御法之花 貞阿上人滝行場之段」を取り上げ、残された床本・古写真を元に、語り、三味線、人形遣いの復元を試みるとともに、外題の主人公「貞阿上人」ゆかりの寺、建治寺で、ゲストとし文楽 豊竹英大夫、三味線鶴澤友清氏を迎えての復元披露公演。大阪の文楽と、阿波の人形浄瑠璃一座とのコラボレーションを、小屋掛け舞台で鑑賞する神山温泉入浴付きの日帰りバスツアー。

四国八十八箇所、十三番札所「建治寺」の桜も見所。